中学社会科教科書の研究（第一報告）

―地理的分野の教科書に関して―

中尾正三・石黒鈞二
織田長繁・都築　亨

Ⅰ まえがき

現在教科書の問題が教育界のみならず広く世間の関心を集めている。それは一つには民主党のパンフレットに端を発した政治的なものもふくみ，又値が高いとか，転校の時困るとかいう制度的な問題からもきている。しかしそれだけでなく，純粋な教育的な意味からもそれは問題とされているのである。すなわち戦後の新教育が教科書を単なる学習のための資料の一つとし，しかもそのすべてを教える必要はなくどこからでも関係のある所をそのつど参照すればよいというふうにみていたことに対する反省からである。そこには日本の教育現場の困難な条件，たとえば施設や教具・学習資料の不十分さ，教師の労働過重や教養の不十分さ（それは教師自身の責任ではないが）などからくる問題もあるが，基本的には単元学習そのものについての問題提出である。これについての究明は他の機会に譲らねばならないが，ともかく学習の中での教科書の位置が重要ないみを持ってきたことは事実である。このことは，新教育の花形であり，単元による問題解決学習の代表的教科であった社会科においてはとりわけ大きな問題である。基礎的な知識とか，系統的学習とかは文部省の改訂の際も問題となったことである。

教科書はすべての生徒がもつ，最も重要な，ほとんど唯一のといってよい学習資料である。これを教師がどのように使っていくかによって違いは出てくるにしても，教科書の内容は基礎的な知識の源泉であり，思考と判断の出発点となるものである。従って教科書にどのようなことが，どのような順序で，どのような角度からもられているかということは，将来の国民的教養の基礎がどうなるかということに決定的ないみを持つことになる。

そうしたいみで我々は義務教育の最後の段階であり，又高校教育の基礎ともなる中学校社会科の教科書についてその内容を分析研究することにした。この研究の中で我々がまず第一にとりあげたのは「地理的分野」についてである。それは系統学習が問題となっている地理・歴史の中で，歴史学習については相当に研究もつまれ，論議もされてきたし，歴史教科書に関する分析研究も公にされているのに対して，地理の分野は今までほとんどふれられてきていないように思えるからである。しかも地理は，愛国心や国際理解と切に結びつき更に現在の生活の問題を科学的には握し，将来に対する希望と夢をも与えていくという重要な役割を持っているのである。

分析研究の対象となつたのは31年度改訂教科書の採択見本として送られてきた14社の教科書である。我々にまづ14種類の教科書について，（Ⅰ）その全体の配列及び地域区分について検討し，（Ⅱ）ついでどのような事項に重点がおかれているかを検討した。それらの中からみいだされたいくつかの類型を代表すると思われる８社（注1）の教科書について，（Ⅲ）更に具体的な内容の検討をすることにした。内容の検討においては，国際理解という点に重点をおき，特に世界の地理のうち次の各地域について事実がどの程度どのようにとりあげられているかを検討した。

①アジア・中国。②ヨーロッパ・イギリス。③ソビエート連邦。④アフリカ。⑤アメリカ合衆国。⑥ラテン・アメリカ。

こゝで発表するのは紙数の関係から第一及び第二の段階までで，第三の内容についての研究は他の機会に譲らざるを得なかった。

Ⅱ 本　　論

1. 日本地理教科書の配列と構成

地理は自然環境の中で人間がどのような生活を営みつつあるか，自然に対してどのように働きかけ，自分たちの生活のためにそれをづくりかえ，役立てているかを学びとるものといえるが，教科書としてそれらの知識をどのような配列で構成しているかは，まえがきでのべたようないみで重要な問題である。

日本地理に関する教科書の配列構成は表Ⅰに示される5種の類型にわかれる。

表 Ⅰ

A.	日本の自然環境——各地域——日本の資源・産業・交通・貿易
B.	日本の自然環境——日本の資源・産業・交通・貿易——各地域
C.	各地域——日本の自然環境——日本の資源・産業・交通・貿易
D.	各地域——日本の資源・産業・交通・貿易
E.	日本の自然環境——日本の資源・産業・交通・貿易

表 2

(イ)	九州——中国・四国——近畿——中部——関東——東北——北海道
(ロ)	←——西日本——→ ←——東日本——→
(ハ)	←—西南日本——→ ←——中央日本—→ ←—東北日本—→
(ニ)	←——中央及び西南日本——→東北——北海道

この5類型の中，C・D類型は旧来の地誌的なものにほとんど大半を費し，日本全体の自然環境・資源・産業などを簡単にまとめるものである。A・B類型は各地域にも重点をおきつつ，日本全体の問題にも相当の配慮をなしているもので，Aに比べて，Bは更に一歩を進めているように思われる。E類型は更に一歩を進めて，日本全体を旧来の地域区分にわけることをせず，統一ある切り離し難い生活圏としては握し，産業地理的に，農業・工業などの各部門ごとにそれぞれの地域を（九州としてではなく，北九州の佐賀平野・福岡市周辺などのとりあげ方で）考察しようという立場をとっている。

A類型が最も多く14社中9社，B類型1，C類型2，D類型1，E類型1である。

こゝでE類型を除く13社の教科書がどのような地域区分をしているかをみてみると表Ⅱの如くである。

（イ）類型をとるもの9，（ロ）類型が1，（ハ）類型が2，（ニ）類型が1である。

以上のことから，現在の日本地理に関する教科書は，大体において従来の地誌学習のみにはとどまらず，日本を全体としてとらえようとする方向に向かいつつあるが，地域区分においては従来の地域区分をそれ程脱却していないといえるようである。産業・交通の発達が明治時代の自然条件をもとに区分された地域区分をこえて，より広い生活圏を成立させて来たことは衆知の事実である。地域区分においては（ロ）・（ハ）・（ニ）の努力更にE類型の立場などが現れているが，（ロ）・（ハ））・（ニ）はただ一応機械的にまとめただけで，内容は（イ）とほとんど変りはないように思われる。又E類型についてはある地域において農業・工業が自然条件の上にからみあつて成立している地域的構造がつかみにくいようにも思われる。今後の研究により，より正しい配列と地域区分がうぢたてられることを期待したい。

2. 世界地理教科書の配列と構成

世界地理の教科書は（自然—各地域—産業・資源・交通・貿易—日本と世界）の配列をとるもの8種，自然を欠くもの6種の2類型にわかれる。世界地理に関しては，日本と同じいみで一つの生活圏をなすとはいえないから，当然いくつかの地域に分けて学習してゆくことになるが，問題はどこから，どのような順序で各大陸を学んでいくか，ということと，いくつかの国をどのようなまとまりで学ぶかということである。

前者の配列は表3の如く3つの類型にわかれる。

（注1.）8社は学圖・教出・實教・中教・日書・日本書院・二葉・山川である

表 3

a.	アジア——ヨーロッパ——アフリカ——アメリカ——オセアニア
b.	アジア——ヨーロッパ——アメリカ——オセアニア——アフリカ
c.	アジア——アフリカ——ヨーロッパ——アメリカ——オセアニア

ここで3つの類型がわかれるのは結局アフリカをどこで学ぶかということになる。日本に最も近いアジアに重点をおき，そこから出発するのは共通であり，それからアジアと同じ旧大陸であるヨーロッパを，その次に新大陸としてのアメリカ・オセアニアを学ぶという点も共通で，問題はその間のどこにアフリカをいれるかということである。アフリカをどこで学ぶかということについては各社ともいろいろ考えているがa類型をとるものが最も多く11種，b類型2種，c類型1種である。中で注目すべきはa類型をとる11種の中2種までがアフリカを独立の章とせず，ヨーロッパに附随するものとして取扱っているという事実である。

次いで問題になるのは，アメリカをどのように区分するかということである。自然的条件をもとに区分される南・北両アメリカの分け方と，人文的条件をもとに区分されるアングロ・ラテン両アメリカの分け方は，アフリカの位置をどこにおくかということと並んで，その教科書の地理に対する基本的な立場を示すものともいえよう。

なお国についていうならばアジアの国家群，ヨーロッパの国家群などと別個に，ソビエトを独立させて扱うもの4，中国を独立項目として扱うもの1，又アメリカ合衆国をアメリカ大陸と別個に扱うものが1つあることは注目すべきいき方といえよう。

3. 各項目に対する比重

限られた紙数の中に一定の知識をもろうとする際，すべてをもることはできないし，どこかに重点をおくことになる。そのいみから，それぞれの項目にどれだけの頁数がさかれているかをみることは，その教科書の重点のおき方を知る一つの手がかりとなる。（もちろん内容をぬきにして頁数のみでそれを判断することはできないのだが。）全体の頁数に対するそれぞれの百分比を出して検討した結果はほゞ次の通りであった。

(1) 日本地理と世界地理については14中10が日本地理に50%以上を割いている。残りの4社の中2社は世界全体の産業問題に，1社は日本と世界との関係にそれぞれ16～20%をさき，他の1社は世界の地誌に重点をおいている。

(2) 世界地理の地域学習に12社は30%以上を費しているが，他の1社はわずか17%を「世界を旅行しよう」という形で簡単にふれ，1社は24%を費し，ともに世界全体を産業別に考察する人文地理的色彩を強く出している。

(3) 各大陸別の比重のおき方をみるとアジアに最も多くの比重を与えるもの7，10%以上の比重を与えるものは10で，又中国に2%以上の比重を与えるもの5であり，アジアが重視されていることがみられる。ついで大きな比重をしめるのはヨーロッパで，最大の比重を与えるものが7，10%以上の比重を与えるもの3である。東欧及びソ連も重視され2%以上の比重を与えるものが8ある。アメリカ両大陸はアメリカ合衆国を除いては，アジア・ヨーロッパに比して比重は軽い。アメリカ合衆国に対して2%以上の比重を与えるものは8ある。オセアニア・アフリカは最も比重が軽く，両者の合計に対して5%以上の比重を与えるものは5にすぎず，6%をこえるものに至ってはそのうち更に2にすぎない。アジア及びその中での中国，ヨーロッパ及びその中での東欧及びソ連，アメリカ合衆国を重視し大きな比重を与えるものがそれぞれ半数以上に及ぶことは現代の国際社会の反映ともみられるが，なお旧来の教科書風の自然と地誌のみに終始するものも数種あることは指摘しておかねばならない。重視するものの中でもその内容はまちまちであり，それについての検討は前述の如く別の機会に譲らざるを得ないが，多くの問題をはらんでいるように思われる。又オセアニア・アフリカの比重が極めて軽いこと，とりわけアフリカのそれは前に(2)において指摘したこと及びその内容のとりあげ方とも相まつて考えさせられざるを得ない。アフリカの未開・産業文化の後進性をどう考えるかは地理についての基本的な問題ではないかと思われるだけに。

Ⅲ むすび

以上地理教科書についてその配列と構成，比重のおき方を検討してきたが，このわずかな検討においても，現在の地理教科書には古いもの，新しいものが混在し，まだ統一した新しいものがうみ出されていないことが明らかになったと思われる。これはそれぞれの内容にたちいれば更に大きく現われてくるのであるが，紙数の関係で他の機会に譲らざるを得ぬことは残念である。

地理教育は歴史教育、政治経済の教育と並んで，国民の社会的知識と理解，更に態度をまで形成してゆく重要な役割を果さねばならず，現在日本がおかれているきびしい現実は真の愛国心と正しい国際理解を切に要求しているのである。そのいみで，一刻も早く我々の住み・生活する日本と世界について正しい知識を最も効果的にもりこんだ教科書がうみ出されることを心から祈願してやまないものである。